お母さんのしごと

昭和五十五年　二年　女児

おかあさんのしごとは、電気のないしょくをしています。前に、長ぼそいないしょくがきたので、こんど、それやるのときいたら、

「ひもをはんたいにして、やりなおしているんだよ。」といいました。おとうさんもおかあさんからやりかたをきいてやっていました。

いつもやっているのは、出ているひもをはりがねにあわせて、「パチン。」ときるしごとです。

わたしが、おかあさんのしごとの中であぶないなあと思うのは、しかくいところがともあつくなっていて、おかあさんがやっていると、ときどき

「あちちち。」というときです。

わたしがひまなとき、おかあさんは、

「ひまなら、ひるねしっでの。」といいます。

おかあさんは足にけがをしています。それは、車こでさおがたおれて、小鳥のかごにあたって、こわれたかごからにげた小鳥を捕まえようとして足にけがをしてしまったのです。いくらばんそうこをはっても、ちがとまりませんでした。なん日かたってやっとなおりました。

そのときから、おかあさんが、あるくときは、けがをした足を弱くついて、けがをしていないほうの足を強くついて、あるいています。とってもいたそうにみえます。それでおかあさんは、ないしょくをするとき、足を長くのばしてやります。

わたしのおかあさんは、とってもやさしいです。外であそんでくると

「ストーブにあたれ。」といいます。おかあさんはこたつにあたりながら、しごとをしています。手をさわると、外にいたわたしより、つめたい手でした。わたしは、がんばって、しごとをしているんだなあと思いました。